（様式２）報告書

令和５年度　（インクルーシブ教育実践研究校 A）報告書　己斐上中学校

１　学校の課題

（１）　個々の生徒に対する取組

本校で実施しているスクリーニングテストの結果や学習面の行動面の見取りから、本校生徒の約３割が何らかの特別な支援のニーズがあると把握している。個別最適な学びを推進し、個々の生徒の特性に合った学習を提供し、学習意欲を高めていく必要がある。

（2）　授業づくりに係る取組

「全ての生徒にわかりやすい授業」を目指しているが、教師主導の一方的な一斉授業からの転換が難しく、生徒自身が気づき、探求心を持って能動的に学ぶ授業になり得ていない実態がある。

２　研究主題

特別支援教育に係る校内支援体制の確立

～ICT 機器を効果的に活用した個別最適な支援体制づくりを目指して～

３　取組内容

特別支援教育コーディネーターを、教務主任、生徒指導主事、学年主任を統括する立場に位置づけ、授業に参加しにくい生徒、困り感のある生徒についての実態把握を丁寧に行い、ICT 機器の効果的な利用、合理的配慮の提供により生徒のかかえる困難さの軽減を図った。

（１）　個々の生徒に対しての取組

①　実態把握（スクリーニングテストによる実態把握と学年・学級のアセスメントの実施）

新１年生全員に対して、スクリーニングテストを実施し、それぞれの生徒の認知の特性を把握するとともに、それぞれの各学級の傾向、学年全体の傾向を把握した。その後、スクリーニングの結果からのアセスメントを行い、学校全体で情報を共有した。

スクリーニングテストでピックアップされた生徒については、個別の指導計画を作成し、その後の授業の様子を特に注意して観察していった。学習に集中できない生徒、学習に向かう力の弱い生徒、読み書きに困難さが見られる生徒に対して、授業中の学習の様子やテストの誤答などからその困りの要因を探り、その手立てを検討していった。個別の指導計画に実施した具体的な手立てとそれに対する評価を記入していった。

校内での実態把握ではアセスメントの難しいケースや、支援の方針が定まらないケース、支援の見直しが必要なケースの場合は、保護者、本人の合意を得て、サポートセンターや他機関につなぎ、詳しいアセスメントをお願いし、対象生徒の状態の把握に努めた。その後も連携を取り、アドバイスをいただきながら支援を検討していった。

②　リソースルーム設置と個別対応

（ア）基礎学力の定着が難しい生徒に対して

授業中、学びにくさが見られる生徒を対象に、リソースルームにて個別授業を行う時間を設けた。各々の生徒のつまずきの状態を把握し、対象生徒とともに課題を整理してその解決方法を模索した。「今、困っていること」を確認し、つまずきの要因に対して、ポイントを絞ってアプローチし、教室の授業での困り感の軽減に努めた。

それぞれの生徒が個々の特性に合わせて iPad を自分の学習手段として主体的に活用できるよう導いた。

【事例】（実態）

生活リズムが整わず、朝から登校することが難しい。遅刻してくるために学習の空白が多く、学習の積み上げができていない。特に漢字の読み書きが苦手で、小学校６年生時、

漢字のテストは読みを中心に行ってきた。小３程度の漢字が読める。書くことへのあきらめがあり、ノートテイクやワークシートの記入にも取りかかろうとしない。

（取り組んだこと）

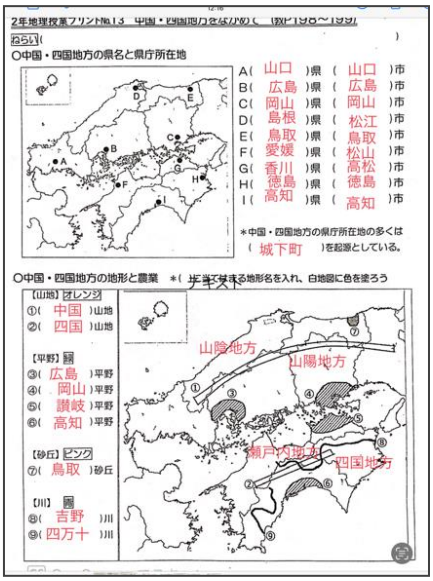
・書くこと

ワークシートを iPad のカメラで写し、「写真」で編集し、キーボード入力した（図１）。自宅で iPhone の入力に慣れており、入力速度が高いフリック入力に設定した。読み方がわからず入力できない漢字を Google アプリで音声化して読み方を調べ、入力できるように練習した。

・漢字

漢字の基本的な運筆の仕方がわからず、どこから書くのかわからない様子が見られたため、アプリ「筆順辞典」を使って練習した。筆順の基本的なルールがわかり、漢字を書くことへの抵抗がなくなったため、漢字テストに自分から挑むことができた。

（※本校は「魔法のプロジェクト」に参加しており，アプリケーションのインストールが可能な端末をプロジェクトから貸与されている。）



（図１）

・理科

元素記号や化学式をアプリ「BitsBoard」の Memory Cards を使ってゲームを楽しみながら暗記し、小テストに臨んだ。

・暗唱

「平家物語」の暗唱テストに向かうための工夫として、「平家物語」の覚え方をインターネットで検索させ、対象生徒が興味を持てるものを選ばせた。対象生徒は、イメージがアニメーション化され、冒頭部分にメロディがついたものを選び、歌を覚えるようにして暗記していった。

（イ）教室に入りづらい生徒に対して

本校では、登校しぶりや教室に入りづらい生徒の学習の場として、「ふれあいひろば 」や「リソースルーム」を位置づけている。他の生徒との距離を置きたい生徒は「ふれあいひろば」で学習しているが、学級や学年の生徒との関りをしっかりと保っていきたい生徒は、各学年のフロアにあるリソースルームで、各学年教師や学習サポーター、コーディネーターとともに学習している。生徒の状態に合わせて学習内容を検討し、個別に教科学習を行った。

③ サポートセンターからのアドバイスを教室で活かすために

（ア）授業中のサポート

サポートセンターから送られた資料を関係者が共有し、サポートセンターと連絡会を持ち、示された効果的な支援法をコーディネーターとともに教科担任が教室内で実践した。活動のどんな場面で困り感を感じているか、どのような方法（手段）を用いたら学習しやすくなり、学習意欲の向上に繋がっていくか、対象生徒に寄り添いながら伴走を続けた。

（イ）情報を全体で共有

対象生徒についての情報は、学年や教科担任だけでなく学校全体で共有した。PC 内に「個別の指導ダイアリー」のフォルダをつくり、日々の記録や個別の指導計画、個別の教育支援計画を閲覧できるようにしている。サポートセンターからのアドバイスをもとに、対象生徒にどのような支援をして、どのような効果が見られるかを記録し共有した。

④ 個別学習と授業をつなぐために

漢字の読み書きが苦手な対象生徒が教室でも iPad を使いやすくするため、学年生徒全体に対して、自分の認知の特性に合わせた iPad の使い方を紹介した。「紙媒体（教科書）を読む」「電子データ（電子教科書）を読む」「読み上げを聞きながら読む」など、どの方法が一番

内容を把握しやすいか選ぶ体験をさせ、自分に合う学習方法を考える機会を設けた。

また、合理的配慮に対する理解についての啓発学習を実施した。「NHK for School」が提供している２分のアニメシリーズ「ふつうってなんだろう？」を用いて、感じ方や感覚の違いに気づかせ、それぞれの違いを認め合い、支え合うことの大切さを伝えた。

学習についても、自分に合った学び方を選択し、自分らしく学ぶべきであること、困り感に合わせた配慮を要求することの公平さ、自分自身で権利やニーズを主張すること（セルフアドボガシー）の大切さを伝えた。

（２）　授業づくりに係る取組

①　授業研修会（公開授業研究会）の実施

授業改善をねらいとした授業研修会を実施した。

岡山大学の佐藤　暁教授に年３回、子どもたちがどのように学んでいたかを検証しながら、子ども達一人ひとりの学びが、より確実に、また、より深化させるための授業づくりについて指導・助言をいただき、協同学習について深く考える機会をもつことができた。

２回目は公開授業研究会として、他校の先生にもご参加いただき、子どもの「学びと育ち」を話題にしながら、「子どもが主語の学校になっているか」「子ども達に何を育てていかなければならないのか」「子ども達に『この学校の授業が楽しい』と言ってもらうために、私たちは何をしなければならないのか」を考える時間を持つことができた。

②　家庭学習とつなぐために

昨年度より、家庭学習の定着のために、フォーサイト手帳、Google Classroom の活用方法を工夫し、家庭での生活のビジョンを持たせること、プランニング力や実行力を高めることに取り組んできた。また、担任からの連絡、学習課題の一覧、生徒が作った定期テストの予想問題、モデルになる生徒のノートやワークシートなどを Google Classroom にアップし、家庭学習に取り組みやすい工夫も行ってきた。

②　ICT 機器を効果的に使った KU デザイン

聞き取る力が弱い生徒が多く存在することから、視覚支援のために電子黒板を使って教科書の提示をしたり、スライドを作成したりして、音声を視覚化させることを意識した。また、グループ活動で話し合ったホワイトボードを写真に撮って、無線で電子黒板に映し教室全体で共有しながら発表するなど、生徒の発言も視覚化し共有しやすくすることに努めた。これからは、ミライシードのオクリンクをもっと活用していけるよう、時間講師も含めた全教員が研修する機会を３回設けた。

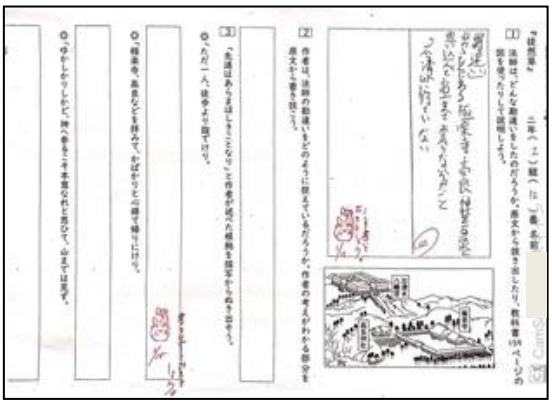
４　検証結果

（１）個々の生徒に対しての取組

図２は事例１の生徒の第１期と第２期の成績の比較である。漢字を書くことに苦手意識を持ち書くことをあきらめていた対象生徒であったが、キーボード入力や漢字の音声読み上げを行ったことで学習意欲の高まりがみられる。音楽の歌のテストや英語のインタビューテストにも準備をして臨むことができた。進路についても進学を前向きに考える様子も見られるようになった。図３、４はサポートセンターと連携をとりながら学習を進めている生徒の国語のワークシートである。図３を書いた頃は、学習の内容が理解できず、ワークシートに記入する意欲もなくしてきている状態が見られていた。図４は iPad でデイジー教科書の音声読み上げを聞き、教科書の内容を把握しながら、自力で設問に答えたものである。手を挙げて発表するなど、自信を持って学習に参加できている姿が見られるようになった。

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語	合計
Ⅰ期末	1	2	2	1	1	1	3	2	1	14
Ⅱ期末	2	2	2	2	3	1	3	1	2	18

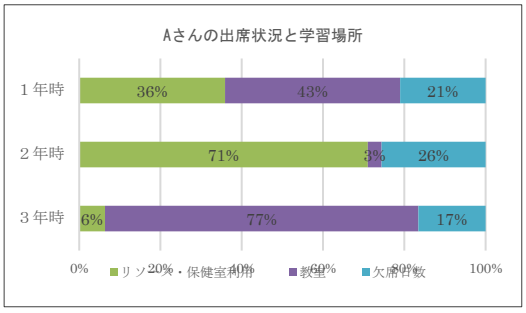
（図２）



（図３）

（図４）

図５は、本校３年生 A さんの３年間の校内での学習場所の推移を表している。１年時の６月頃から教室への不適応から欠席が見られ始めたが、リソースルームや保健室で個別対応を続けたことで、３学年になると教室に戻り、授業に参加できるようになった。

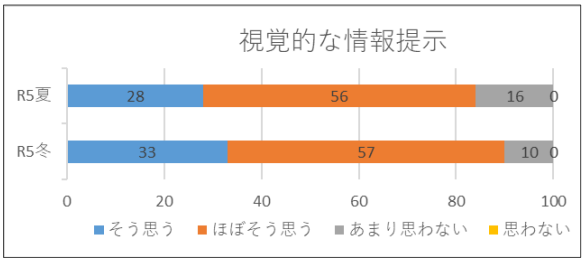


（図５）

この生徒に限らず、インクルーシブ教育実践の取組を始めてからの６年間において、リソースルームや「ふれあいひろば」を利用していた生徒が、生徒同士のつながり、保護者との連携、生徒に寄り添った対応により、学級集団に戻ったケースが毎年複数件見られるようになった。また、過去６年間、不登校生徒が減り、全休の生徒がほとんど見られないことから、それぞれの生徒のニーズに合わせた支援により、学校がそれぞれの子どもにとっての居場所として成り得ていたと思われる。

（２）授業づくりに係る取組

図6のグラフは教員対象に行った学校評価アンケートの結果である。設問「視覚的な情報提示の工夫をしていますか」の問いに対して、R5年の夏に84%であった評価が R5 年の冬には90%に上がっている。授業の中で、ICT を活用し、より分かりやすい授業を工夫しようとする教員の意識が高まっていることがうかがわれる。



（図６）

５　研究成果

（１）　リソースルームの設置の効果を職員間で共有することができ、来年度、専任特別支援教育コーディネーターがいなくても、学校全体でリソースルームの設置と運営を続けていく計画が進んでいる。個別学習で個に応じた支援をしてきたことが、教室で学習に向かう力に結びついたことを学校全体で共有し、今後も継続して取り組んでいきたい。それぞれの生徒に合った学び方を考え、それぞれに合った支援を行ってきたことが、誰一人切り捨てることなく、全ての生徒の学びを保証することに繋がってきたと思われる。

（２）　全ての子どもの学びを保証するために、「子ども同士をつなぐ」「教材と子どもをつなぐこと」に取り組んできた。そのための手段の一つとして、ICT を活用して、誰にでもわかりやすい視覚的な支援を行おうという意識が高まった。